

# Apple

— その「実」と「名称」をめぐって —

村 端 五 郎

## <Abstract>

This paper examines the origin and migration of apples, and explores the historical development of their names, particularly those adopted in Chinese and Japanese, including the equivalents of the English name 'apple.' While the apple has been one of the popular fruits in the history of man, so much is left unknown about its both botanical and naming history. The results show that domesticated apples originated in the north-western region of China, at the foothills of the Tian Shan (天山), where two genetically distinct kinds, small and large apples, of the same family have grown wild. It is also found that 'Ringo'(林檎), a commonly used Japanese name of the apple, is a loan word from old Chinese to designate a small kind, and that after the introduction of a large kind, i.e. 'apples', from western countries to Japan in the 1860s, a distinctive equivalent was coined with different Chinese characters 苹果, which reads 'Oh-ringo', 'Seiyo-ringo', or more directly 'Heika.' However, 苹果 was then replaced with the former name 'Ringo'(林檎) and was almost completely removed from our memories and even from English-Japanese dictionaries as well. Finally, it is pointed out that further research is necessary to examine the relationship between 苹果 of the extinct Japanese word and 苹果 of the present Chinese one to clarify a possible exchange of the Chinese and Japanese languages and the process of the establishment of equivalents in English-Japanese dictionaries of modern and present times.

## 1. はじめに

It is remarkable how closely the history of the Apple-tree is connected with that of man. The geologist tells us that the order of the *Rosaceae*, which includes the Apple ... were introduced only a short time previous to the appearance of man on the globe (Thoreau 1862, p.1).

Apple (*Rosaceae*, 薔薇科)は、人類がこの地球上に登場する以前から存在し、その歴史は人間の歴史と言っても良い。このようにAppleが人間と密接なつながりを持ってきた理由の1つは、すでに紀元前のペルシャやギリシャ、ローマの頃までには、Appleは極めて栄養価の高い便利な食物として広く人々に食されていたことによると考えられる (Juniper and Mabberley 2006, p. 11)。そして、今やわが国をはじめ、世界の多くの地域や国では代表的な果物となっている。

しかしながら、このように古代から我々の身近にありながら、かつ、19世紀末から de Candolle (1885)をはじめ、植物科学者によって栽培植物の起源や伝播に注目が集まるようになったにも拘わらず、Appleの原産地に関してはほとんど解明されていない (Juniper and Mabberley 2006, p. 12)。

また、実 (substance) としてのAppleを指す名称 (name) も古来より様々で、時として実と名称とが複雑に交差している場合もある。たとえば、現在、わが国ではAppleは「りんご(リンゴ)」、漢字で書けば「林檎」と対応させるのが一般であるが、宮沢賢治などはAppleに対して「林檎」ではなく「苹果」の字をよく使っていた (宮沢2005)。これは、土佐が輩出した世界的植物学者・牧野富太郎の、Appleはリンゴあるいは林檎ではなく、正しくはオオリンゴあるいはトウリンゴ、セイヨウリンゴ、漢字で書けば「苹果」としなければならない (牧野1949, p. 73)、との主張に通じる。また、明治時代に刊行された英和辞書の中には、Appleを「苹果」としているものも認められる (例えば、島田豊『附音挿圖和譯英字彙』明治21(1888)年)。さらに、現代中国語ではAppleの対応語 (equivalent) として「林檎」ではなく、この「苹果」をあてている。

本論の目的は、実としてのAppleの起源や種類、伝播の経路などに関する最近の研究の成果を踏まえつつ、特にわが国の植物名に大きな影響を与えている中国における名称の変遷とわが国における名称の変遷、とりわけApple渡来後の対応語 (equivalent) について考察することである。

## 2. 考察の視点

「実」としてのAppleとその「名称」を明らかにしていくにあたり、まず、その鍵となる2つの視点を明確にしておく必要がある。まず第1の視点は、植物分類学上の所属という観点からどのような「実」としてのAppleが存在していたか、あるいは現在も存在しているかを検討することである。すなわち、植物体あるいは果実としてのAppleに、どのような種類や異種が存在するかである。異種の存在を確かめるには、植物(果物)としてのAppleは、そもそもどこで生まれ、どのように世界に広まって現在にいたっているのか、その原産地と伝播の経路を探る必要がある。

第2の視点は、名称の来歴を掘り起こすことである。つまり、植物(果実)名あるいは英語名としてのAppleに、どのような中国語名や日本語(訳語)名称が使われ、それらは

いつ頃から、どのように使われてきたのかを明らかにすることである。その際に留意すべき点はいくつかある。まず第1に、名称とは何かについてである。植物名といっても、つぎのナズナの例が示すように様々な種類があるからである。

表1 「ナズナ」の名称(清水1978, pp. 123-124に基づく)

- 
- (1) 学名・・・Capslla Bursa-pastoris Medicus  
 (2) 普通名 正名(和名)・・・ナズナ  
           異名(一名・別名)・・・ペンペンサ  
           (方言)・・・シャミセングサ・ナナクサなど
- 

植物名には大きく分けて、学名(scientific name)と普通名(common name)の2種類がある。本論で主として問題にする名称というのはAppleの対応語である。これは、普通名のうちの正名(和名や英名など)にあたる。

一方、学名というのは、その当該植物の特徴を表すラテン語で表記され、1つの植物に1つだけ与えられる国際共通の名称である。上のナズナの場合でいうと、Capsllaが「小囊」という意味の属名で、Bursa-pastorisが「羊飼いのポケット」という意味の小種名、Medicusは命名者(Friedrich Casimir Medicus)の名前となっている。

このように学名は世界に1つの実を特定する機能をもっていることから、上述した第1の視点、すなわち実としてのAppleに異種があるかどうかは、言い換えれば、学名の異なるAppleが存在していたか、あるいは、存在するかを確認することである。

第2に留意すべき点は、名称(正名)にあてる漢字についてである。たとえば、「林檎」も「苹果」も、ともに漢字が使われているが、植物名に使われる漢字といっても、異種があるので注意を要する。すなわち、植物名に使われる漢字にはつぎの3種類があるからである(清水1978, pp. 123-124)。

- (1) 漢名：漢語(中国語)の名称
- (2) 漢字名：日本産植物に日本でつけた漢字の名称
- (3) 国字名：日本産植物に日本でつけた和製漢字の名称

「漢名」というのは、文字通り漢語(中国語, the Chinese language)の名のことで、中国でつけられた正名である。一方「漢字名」というのは、中国には存在しない植物で、したがって漢名のない日本産植物に日本でつけた漢字の名称のことをいう。例えば、樺(ケヤキ)や一位(イチイ)などがそれである。最後に、「国字名」というのは、わが国で造字して日本産植物につけた、いわゆる和製漢字(和字)の名称である。例えば、「春に盛んに花をつける」ので「木偏きへんに春」と書いて「椿(ツバキ)」、「秋に花をつける」ので「草冠くさかんじりに秋」と書いて「萩(ハギ)」としたり(牧野1943, pp. 225-226)、「神事に用いる」ので「木偏きへんに神」と書いて「榊(サカキ)」とするなど、これらが国字名の例である。

このように漢字を使った名称といっても漢名と漢字名と国字名というように違いがある。これらは字体が同じだけに時として思わぬ混乱を招くことがある(牧野富太郎 1943, p. 124)。漢字和名と漢名が一致して同一植物を指すものもあれば、同じ漢字を使っても異なる植物を指すこともあるからである。例えば、[フウラン]の漢字和名は「風蘭」で、漢名もやはり「風蘭」である。しかし、表2のように[ツバキ]の国字名は「椿」であるが、その漢名は「山茶」で、漢名「(香)椿」の和名はチャンチンで、[ツバキ]とはまったく異なる植物なのである(牧野 1948, p. 384)。また、日本原産の[サザンカ]の漢字名は「山茶花」で、漢名は「茶梅(桜)」(村越三千男 1940, p. 17)である。このように、漢名と漢字名、国字名の間には様々な交差が見られる。

表2 漢名・漢字名・国字名の交差現象

和名	漢名	漢字(和)名	国字名	学名
ツバキ	山茶	-	椿	<i>Camellia japonica</i> L. var. <i>japonica</i>
チャンチン	(香)椿	-	-	<i>Toona sinensis</i> (A. Juss) M. J. Roem
サザンカ	茶梅(桜)	山茶花	-	<i>Camellia sasanqua</i> Thunb. ex Murray

以上、Appleの実と名称を考察するための2つの視点を検討してきた。まとめると以下のようなになる。

視点1(原産地と伝播の経路): 原産地と伝播の流れを整理して、植物分類学上、どのようなAppleが存在したか、あるいは現存するかを明らかにする。

視点2(名称の来歴): Appleには、漢名、漢字名、国字名を含めた、どのような名称があり、それらは、いつごろからどのように使われてきたかを明らかにする。

次節では、これら2つの視点をもとに、Appleの種類とAppleの名称(対応語を含む)の起源、変遷を具体的に検討していくことにする。

### 3. Appleの原産地と伝播の経路

#### 3.1 Appleの原産地

栽培植物(cultivated plants)の起源について、植物分類学や考古学、古植物学、民俗学などの観点から本格的に考察した最初の人物は、ドゥ・キャンドール(de Candolle)であった。その著書 *Origin of Cultivated Plants*(1885)によれば、Appleの野生種(wild apple)は、極北部を除くヨーロッパや小アジアとも呼ばれるトルコのアナトリア地方(Anatolia)、黒海(the Black Sea)とカスピ海(the Caspian Sea)に挟まれた中央アジアの高原地帯のコーカサス地方(Caucasus)に広く見られ、コーカサス地方が[リング]の原産

地として最も有力であるとしている (p. 234)。そして、この地方に起源したリンゴは、人の移動にともなって東西へと伝えられ、様々な地で栽培されるようになったと考えられた。今から約4,000年前の先史時代のことである。

興味深いのは、既にその頃から大きさの異なる大小2様のAppleが認めら

れていたことである。スイスの古遺跡から発見された乾燥した小果のAppleは、縦径が15mmから24mmで、横径が縦よりそれぞれ3mm程度長く、大果のAppleは縦径が29mm-32mmで、横径が36mmであった(図1)。これらは乾燥したもののなので、生の[リンゴ]はそれらより少し大きかったものと考えられる。その当時のAppleは、酸味と渋みが強く、生食にはあまり適さず、むしろ縦割りにして乾燥させ、冬季間の食料に供したものと考えられている。

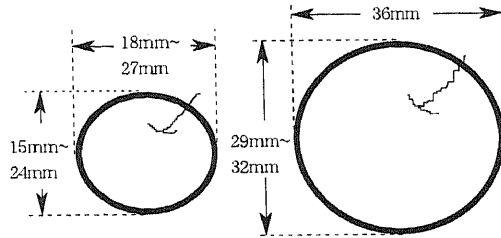


図1 古代の乾燥[小リンゴ][大リンゴ]のサイズ

さて、20世紀の初頭にAppleの原産地をめぐる議論に新たな展開があった。ロシアのVavilov(ヴァヴィロフ)は、前述のde Candolleの説にさらに独自の考察を加え、wild appleは、中国、カザフスタン(Kazakhstan)、キルギス(Kyrgyz)、タジキスタン(Tajikistan)の国境の天山山脈(the Tian Shan)からカスピ海までの範囲に起源したとしたのである(Vavilov 1980, ff. 206)。また、同氏は、カザフスタンのwild appleは、栽培種に近い大きな果実をつけ、味のよいものもあったと報告している。

そして近年、このVavilovの説をさらに裏づける発見があった。まず、1992年には、中国・新疆ウイグル自治区の新疆という町の近郊でwild appleの群生地が確認された(大石2002, p. 25)。また、その翌年の1993年には、新疆の北部地域(北緯47.5度)で、径が70mm程度の比較的大きなwild appleも発見されたのである(大石2002, p. 26)。さらに、分子系統分類学(molecular systematics)の革命的な進歩によって、DNAによるwild appleに関する研究成果から、新疆の周辺地域、すなわち天山山脈の「果実の森」が栽培Appleの原産地であると結論づけられたのである(Juniper and Mabberley 2006, p. 53)。

Selections from the fruit forest of the Tian Shan, likely on more than one occasion, could be the source of all the variation seen in the domesticated apple, without the involvement of any other species thought the opportunity would seem to have been available.

しかも、興味深いのは、Appleには多様性(polymorphism)と異形接合性(heterozygosity)という性質があるという(Juniper and Mabberkey 2006, pp. 25-26)。すなわち、Appleは他の薔薇科の植物と異なり、非常に種類が多いにも拘わらず、なお同

種であるということが多く、また、Appleは独特の対立遺伝子(incompatibility alleles)をもち、相補的な対立遺伝子を持つもの以外とは異種交配せず、たとえそれが近縁種であっても受粉後において発芽を抑制する性質があるというのである。このことは、Appleには種類が多く、しかも大果と小果の別種のAppleが古代から存在するという事実は、これらの2つの性質から首肯できる。

さて、次節では、このように中国北西部・天山山脈麓に起源する大小2様のAppleは、そこからどのような経路で東西へ伝播していったのか、とりわけ日本には、どのタイプのAppleが、いつ頃渡来したのかを詳しく見ていくことにする。

### 3.2 [リンゴ]の伝播経路

まず、結論からいうと、先ほど述べた大小2様の[リンゴ]は、渡来した時代は大きく異なるものの、原産地から東西2方向に伝えられ、ちょうど地球を1周する形で両タイプとも日本に伝えられている。現在、植物学分類学界では、大小2様の[リンゴ]の代表は、それぞれにつぎの学名が与えられ、明確に区別されている(牧野2000, p. 264)。

大果[リンゴ] 学名：*Malus domestica* Borkh

小果[リンゴ] 学名：*Malus asiatica* Nakai

以降においては、実としての大果[リンゴ](*Malus domestica* Borkh)を指す場合は[大リンゴ]、小果(*Malus asiatica* Nakai)を指す場合には[小リンゴ]として区別することにする。

さて、[小リンゴ]は、[大リンゴ]よりかなり早い時期に日本には渡来した。そこで、まずは[小リンゴ]の伝播について検討する。日本に渡来した[小リンゴ]は、中国原産の[小リンゴ]で、平安時代中期のころに朝鮮半島を経て日本海(the Japan Sea)を渡ったものと考えられている。

渡来した[小リンゴ]は、京都の嵯峨野や青森、長野など、日本各地に広がった。江戸時代の本草学者・飯沼慾齋の『草木図説 木部』には、中国や西洋などには種類は多いけれども、わが国には一種しかないと記されており(飯沼1865, p. 183)、江戸末期までは[リンゴ]といえば、わが国には、この[小リンゴ]1種しか存在しなかった。牧野富太郎は、昭和31年刊行の著書で、この樹が、甚だ少なくなっていて、あまり普通にはこれを見ない(牧野1956, p. 21)、と述べているので、昭和中期頃には、すでにこの種の[リンゴ]の栽培は衰退していたものと思われる。現在では、長野県(飯縄町では「高坂林檎」という異名で種が保存されている)や奈良県(奈良公園内にある春日大社の「林檎の庭」)などに数本の原木が保存されている程度であるという(市川2005, pp. 12-25)。

中国渡来のこの[小リンゴ]は、円形で、径が3cm-4cm程度と小さく、早生種で、お盆の頃に収穫して仏壇に供えたりする。酸味が強くあまり保存が利かなく1ヶ月ともたないものばかりである(斎藤1996, p. 24)。そのため生食用としては、あまり好まれないの

で、日に晒し乾燥させてから遠方に送る菓子として利用していた。

さて、つぎに[大リンゴ]の伝播経路を検討してみよう。まず、“シルクロード”(the Silk Road)の旅人たちは、天山山脈の麓に野生する[リンゴ]のうち、比較的大きくて味のよいものを選んで食し、その種を落としながら西へと移動した(Pollan 2001, p. 11)。そのように自然淘汰された種から、また新しい[リンゴ]が育つ、ということを繰り返し、直接人の手によらずに自然の力で改良された[大リンゴ]は、ヨーロッパまで伝わったのである。その栽培及び改良は、主として欧州中部以北において盛んに行われ、特にアングロサクソン民族(the Anglo-Saxons)によって愛好された(菊池1948, p. 28.)。

そして、接木の技術を身につけていたローマ人は、人工的に改良を加えた数十種の[大リンゴ]を栽培し、そのいくつかを英国に持ちこんだ(Pollan 2001, p. 12)。*[大リンゴ]*がイギリス海峡(the English Channel)を渡ったのである。そこで英国人によってさらに改良が加えられ、17世紀初頭の1629年頃に、米国・マサチューセッツ湾(the Massachusetts Bay)の統治者、ジョン・エンデコット(John Endecott)が、英国から米国に[大リンゴ]を持ちこんだ(*The Century Dictionary* 1889, p. 273)。*[大リンゴ]*の果樹は、さらに大西洋(the Atlantic Ocean)を渡ったのである。

しかし、その接木による幼木は“新世界”の気候風土にうまく適応せず、多くは冬期間中に枯死した(Pollan 2001, p. 12)。そこで移民たちは、大西洋横断時の食料として持参して食べ残った[リンゴ]の種を新天地に蒔いて育てたのである。それがうまく根づいて大いに繁茂した。18世紀もまもなく終わろうとしていた頃である。

さらに、その後、西部開拓の流れにのって、人々の重要な食料の一つとして全米に広がっていった。米国内に[大リンゴ]が普及したのは、ジョン・チャップマン(John Chapman、人々は彼を親しみを込めてJohnny Appleseedと呼んだ)という西部探検家の功績が大きかったと言われている。チャップマンは、藪に分け入り、整地して種をまき幼木を育て、安価で人々に売って広めていった。渡来当初のその主な利用目的は、リンゴ酒(cider、シードル)を作ることであったが、生食に適すまでに改良が加えられていた。‘As American as apple pie’「極めてアメリカ的」という成句ができるくらい、アメリカでの[リンゴ]栽培は大きな産業となったのである(*The World Book Encyclopedia* 1978, p. 234)。

一方、アジア中央道の旅人たちは、天山山脈周辺地域に野生する大果タイプの[リンゴ]を東方へも伝えた(de Candolle 1885, p. 234、インド北部を経るルートというのは新疆ウイグル地域を通過するタクラマカン砂漠の北側ルート「天山南道」に対して、同砂漠の南側ルート「西域南道」と呼ばれているルートを指している)。アジア中央道は西紀前から開通していたので(菊池1948, p. 37)、中国に大果系の[リンゴ]が広まったのは、1世紀ごろではないかと考えられている(田中正武1989, p. 597)。この[大リンゴ]の中には、果実の形はやや縦長の楕円形をしているものや果皮も果肉も深紅色をしているものもあった(菊池1948, pp. 31-38)。

興味深いのは、その理由は不明ながら、中国人はブドウやナシやモモなどを改良した

にも拘わらず、この西方渡来の大形[リンゴ]をあまり改良しなかったことである(牧野他監修 石井編 1956, p. 2595)。そのため、陸路で伝えられた大果系[リンゴ]は中国ではあまり栽培されず、徐々に姿を消してゆく運命にあった(菊池 1948, p. 37)。そのためか、徳川時代に中国渡来の[大リンゴ]がわが国に栽培された記録はない(菊池 1948, p. 40)。しかし、明治初年に、中国からわが国にこの[リンゴ]が持ちこまれたが、普及するには至らなかった(菊池 1948, p. 38)。やはり、この[リンゴ]は、ジューシーで甘みも香りもそれほど悪くはなかったが、果肉は少し熟すると綿のように柔らかく、完熟するとはぼそそして食用に堪えなかったものと考えられる(菊池 1948, p. 38)。

さて、米国の[大リンゴ]に話を戻そう。その後、米国産の[大リンゴ]はどうなったのであろうか。[大リンゴ]は太平洋(the Pacific Ocean)を渡り、ついに日本に伝えられたのである。それは江戸時代末期、文久年間(1861-1864年)のことである。江戸は巢鴨、越前藩主松平春嶽の江戸別邸に植えられたのが最初であると言われている(大日本山林會 1913, p. 15)。植樹から結実まではしばらく時間がかかるので、松平春嶽の苗木が果実をつけたのは、それから数年後のことであろう。

実は、慶応3年に同国産の[大リンゴ]の果実が米国から大量に送られてきたことがあった。博物学者で後に政府官吏となる田中芳男は、つぎのように当時のことを述懐している(大日本山林會 1913, p. 18)。

(前略)其果實は見た所もよく味も良いので人々は驚きました、こんなものが世の中にあるかと言つて珍らしがった(後略)

田中芳男は、日本国内において[大リンゴ]の果実を試食した数少ない日本人だったのであろう。このような良品種[大リンゴ]の登場は、中国渡来で平安時代からわが国で栽培されていた[小リンゴ]が、その後、次第に栽培生産されずに姿を消してゆくことになった直接の要因であることは間違いない。

こうして日本に渡来した画期的な[大リンゴ]であるが、本格的にその苗木の導入が始まったのは明治維新後の明治4年のことである。開拓使と民部省が中心的な役割を果たした。導入に関わった人物の中には、民部省の細川潤次郎(天保5(1834)年-大正12(1923)年)がいた。細川は、土佐出身で、長崎と江戸で洋学を学び、土佐藩藩校・致道館ちじょうの洋学教授も務めたことのある洋学者・政治家である。細川は、英語を教わったり、Websterの辞書を譲り受けるなど、ジョン万次郎とも親交を重ねた人物であった。

明治4年に視察のため渡米した細川は、後に北海道開拓使の顧問として来日する米国農務局長ホーレス・ケプロン(Horace Capron)の助言を受けて滞米中に大量の種苗を購入した(斎藤 1996, pp.10-11)。その中に[大リンゴ]の苗木も含まれていたのである。その多くは、米国ではRalls Janetと呼ばれた原品種で、後に「国光」という名称で広く人々に愛されわが国の基幹品種として100年にわたってリンゴ産業を支えた品種である。

日本に到着した苗木は、試験場で接木により大量に繁殖された。そして、それらは明



治7年から北海道や青森、岩手、秋田、山形、長野の各道県に配布され、その普及をみたのである(田中正武1989, p. 598)。たとえば、青森には明治8年にわずか3本の苗木が届き、その後大いに品種改良が加えられ、その数は明治30年頃には約30万本にまで増え、国光に加えて、紅玉・柳玉・祝・倭錦・紅魁・紅紋という青森リンゴを代表する7品種ができていった(杉山・杉山2005, pp. 183-184)。

明治の中頃、日本から中国に果実のリンゴを輸出したことがあった。中国には現在でも「国光」というブランド名で市場に出回っているリンゴがあることから、果実だけでなく、「国光」の苗木も中国伝わっていたと考えられる。

さて、これまでの議論をまとめてみよう。ここでは、第1の視点、すなわち、原産地と伝播の流れを整理して植物分類学上(学名が異なる[リンゴ])が存在したのか、あるいは現存するのか、を明らかにしてきた。要点をまとめると以下の通りとなる。

まず、[リンゴ]には、古代から(現在も学名の異なる)大小2様の区別があり、原産地は中国北西部の天山山脈の麓である。大小2様の[リンゴ]は、人の移動によって東西へと伝播され、日本にはその大小両形の[リンゴ]が渡来している。しかし、それぞれの渡来時期と経路が異なる。小果の渡来は古く、平安時代にまで遡る。中国原産で、東回りルートで日本に持ち込まれた。この小果は、明治初期に[大リンゴ]が渡来するまでは広く栽培されていた。しかし、味・香ともに勝る[大リンゴ]に主役の座を譲ってからは、次第に栽培・生産も減少し、現在では、ほとんど市場に出回ることがなくなった。

一方、[大リンゴ]は、中央アジアから東回りルートで、インド、中国を経由して明治初期のころに、わが国に伝来した。しかし残念ながら、この種はあまり改良されずに来たため、味や香りや食感などに課題があり、わが国では普及するに至らなかった。それとは対照的に、西回りルート、つまり、欧州、英国、米国を経てわが国に導入された、同じく大果系の[リンゴ]、つまりAppleは、わが国に定着して広く栽培され、リンゴ産業の基幹品種となった。しかも、この[大リンゴ]は、わが国に止まらず、さらに西方への旅を続けた。日本で人気品種となった一部のAppleは、明治の中頃に日本海を渡り、中国にも伝えられたのである。

さて、これで[リンゴ]はどこで生まれ、どのように東西に伝えられていったのか、その原産地と伝播経路の概略が明らかになった。次節では、第2の視点、すなわち、わが国で使われてきた正名としての「林檎」や「苹果」は、漢名、漢字名、国字名のいずれなのか、それらは、いつごろから、どのような[リンゴ]を指すことばとして使われてきたのかを検討することにしよう。

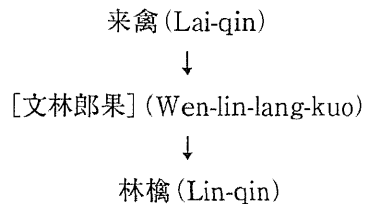
## 4. Apple に対する名称の起源と来歴

### 4.1 [小リンゴ]に対する名称

まず、現在でもわが国で[リンゴ]にあてる漢字として使われる「林檎」の起源と来歴

について検討する。このことばは、どこに起源し、わが国ではいつ頃からどのように使われてきたのであろうか。前節では、古来からわが国で栽培されていた[小リンゴ]は平安時代ころに中国から導入されたことを確認したが、「林檎」ということばは、この[小リンゴ]の伝播と同時に中国からもたらされたことばと考えられている。したがって、「林檎」というのは漢名で、[小リンゴ]を指すことばとして、中国語からもたらされたものなのである。当然ながら、Appleの中国やわが国への本格的な渡来は1870年頃、つまりわが国においては明治初期まで待たなければならないので、日本語に移入された「林檎」という漢語はAppleの対応語ではなっかことは明らかである。

さて、中国では、この「林檎(Lin-qin)」という漢名は、6世紀の頃の本草書にすでに見ることができる(賈思勰『齊民要術』533年-544年、菊池(1948, p. 33)による引用)。この漢名「林檎」の起源については、つぎの説が有力である。



当初は「来禽」という漢字が使われていた。これは、この果物がとても美味しいので「禽(鳥)(qin)」が集まって「来(Lai)」ることに由来する。その後「文林郎(Wen-lin-lang)」という人物が黄河を流れ下る[リンゴ]の種を拾って種えたので「文林郎果(Wen-lin-lang-kuo)」と呼ばれることもあったが、「文林郎」に因んで、「来禽」の「来」が「林」に、木になる果物なので「禽」が「檎」になり、最終的に「林檎(Lin-qin)」となったのである(李時珍『本草綱目』1578年)。この[小リンゴ]を指す漢名「林檎」は、良質の、いわゆる西洋[大リンゴ]が19世紀に西洋から渡来するまでは、中国では日常的に広く使われていたものと考えられる。

しかし、前節で見てきたように、[小リンゴ]が、主役の座を西洋[大リンゴ]Appleに譲ると、この「林檎」ということばも次第に使われなくなった。現在では、この漢名が中国語であったことさえほとんど忘れ去られているのではないだろうか。ただし、小形の[リンゴ]は、現在でも中国では「花紅(Hua-hung)」あるいは「沙果(Sha-guo)」(伊地智(2002)では、「ワリンゴ、≒花紅、林檎」としている)という名で一部栽培されているようである。

一方、わが国においては、古くは深根輔仁『本草和名』(918年頃)や源順『倭名類聚鈔』(931-938年)などの書物に「林檎」の字が見られる。たとえば、後者では「本草云林檎音禽和名利宇古宇與柰相似而小者也」とされ(巻17、9丁表)、「林檎」という漢語があげられ、和名は「利宇古宇」と万葉仮名が振られている。『倭名類聚鈔』は、平安時代に作られた国語辞書で、まず漢語で同類の名詞を集め(類聚し)、意味によって分類して項目

をたて、万葉仮名で日本語に対応する名詞の読みをつけたものである。その上でさらに、中国で出版された書物(漢籍)を出典として引用しながら説明を加えている。このことから、「林檎」は小果の類を指すことばで、当時の日本ではこの[小リンゴ]を「リウコウ(Riukou)」という音訳をしていたことがわかる。

その後、文明年間の書物にも登場するが、この頃までには「リウコウ」は、ほぼ、現在の「リンゴ」の音に転訛したものと考えられる。それは、京都の内裏・清涼殿にある御湯殿上に詰めていた、天皇のそば近くに仕える女官が書いた『御湯殿上日記』(文明10(1478)年)に「二そん院よりりんこ一折まるる。」というくだりがあるからである(司馬1995, p. 475)。司馬(1995)によると、「二そん院」(二尊院)とは京都の北西の嵯峨野にある寺で、そのあたりはりんごの名産地であったという(p. 476)。また、元禄年間に刊行された人見必大の『本朝食鑑』(1697)にも「林檎」の項があり、次のように記されている(pp. 40-41)。

林檎の樹は梨に類し、花・葉は海棠かいとうに類している。二・三月に花を開く。初つばみ蒼は深紅色であるが、開くと白い花に微紅を帯びる。六・七月に円子まるいみが熟する。初め子の外表は深青色であるが、日を経て次第に半青半紅となる。味は甘酸あます・いれい。また外表は黄色で、最も後おくれて深紅紫色なかいもよくむとなるものもある。内部は薯蕷いもを蒸熟したようで、味も純甘・微酸であり、白い穰わた、黒い核たねである。

このように漢名の「林檎」は、江戸時代末期までは、主にこの[小リンゴ]を指す名称として使われていた。「リンゴ」の他、「リンキン」「リンキ」と読まれることもあった(貝原1709)。

その一方で、幕末・明治初期の代表的な英和辞書を調べてみると、植物・果物としての西洋リンゴ、すなわち[大リンゴ]が本格的に導入される以前から、Appleの対応語として、この漢名の「林檎」が使われていたことも事実である。たとえば、わが国初の活字印刷による本格的な英和辞書である堀達之助『英和對譯袖珍辭書』(文久2(1862)年、世界で現存が確認されているのは17本で、その内の1本が牧野文庫(高知県立牧野植物園)に1本所蔵されている)では、Appleは「林檎」と訳されている。堀達之助が、この辞書でAppleに「林檎」という訳語を与えたのは、当時すでに舶来していた英漢字典(たとえばMedhurst(1847-8) *English-Chinese Dictionary*)やわが国で刊行された蘭和辞典(ドゥーフ1811-1816)を参考にしたものと思われる。

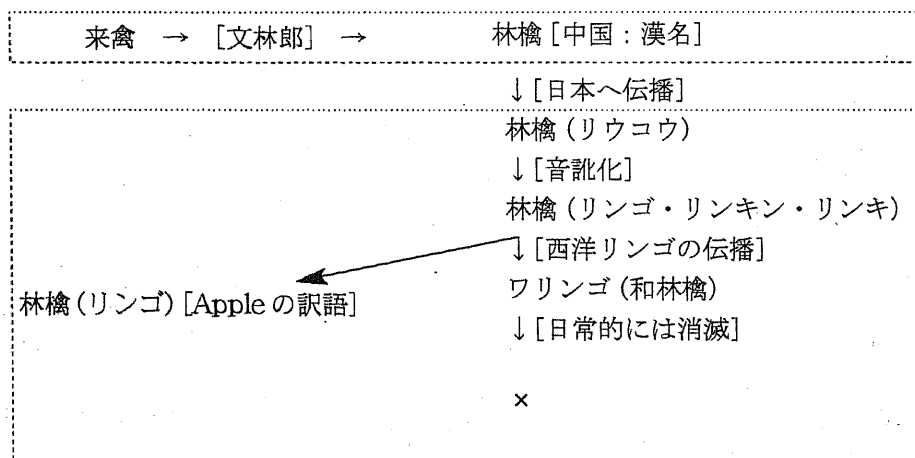
この堀達之助の辞書の他にも、Appleを「林檎」としている辞書がある。たとえば、ヘボン『和英語林集成』(慶応3(1867)年)、柴田昌吉・子安峻『附音挿圖英和字彙』(明治6(1873)年)などがそうである。言うまでもなく、厳密な意味で言うと、この訳語は正確ではないが、Appleそのもの(実体)がそれほど普及していない時代にあっては止むを得ないことであろう。

しかし、本格的にAppleが導入され、各地で栽培が始まるようになると状況は大きく

変化してくる。すなわち、在来(中国渡来)の[小リンゴ]と舶来の Apple を明確に区別する必要がでてきたのである。そこで、わが国在来の[小リンゴ]に対して「ワリンゴ(和林檎)」(一部の地域では「地林檎(じりんご)」)という和名が用いられるようになった。また、異名として「林檎」という漢字をあてて「リンキ」と呼ぶ地方もある(市川 2005, p. 30)。牧野富太郎は、『牧野日本植物圖鑑』において、「林檎」の一名としてこの「和林檎(ワリンゴ)」を取り上げ「和林檎ハ日本林檎ノ意ニシテ和ハ日本ヲ云フナリ」(牧野 1940, p. 470) と解説を加えている。このように、「林檎」の一名として、国産というイメージを出した「ワリンゴ」ということばが使われたのである。

しかし、このように西洋渡来の Apple の登場によって、それと区別するために新たに造られた「ワリンゴ」であるが、このことばが指す [小リンゴ] 自体が次第に栽培されなくなったことから、次第に使われなくなった。これは、中国における漢名の「林檎」の運命と重なり興味深い。現在では、この新造語「ワリンゴ」は植物学関係書や日本語辞書で認めることはあっても、日常的に使われることはほとんどない。たとえば、新村出『広辞苑』(第5版、平成 10 (1998) 年)の「りんご」の解説中に「古くはワリンゴのこと」、前田富祺監修『日本語源大辞典』(平成 17 (2005) 年)の同じく「りんご」の解説中に「西洋リンゴが普及する以前の和リンゴなどの総称」などと「和(ワ)リンゴ」の字が見られる程度である。

さて、これまでの「林檎」に関する議論を図にしてまとめてみる。



中国から[小リンゴ]の伝播と同時に「鳥(禽)が集まって来る所」を起源とする漢名「林檎」が日本に伝わり、「リウコウ」、後に「リンゴ(リンコ)」と音訳された。ただし、「林檎(リンゴ)」は、欧米からの Apple の渡来以前から、わが国の英和辞書などで、その対応語としても使われていた。その後、本格的に栽培が進む Apple と区別するために和名「ワリンゴ(和林檎)」が造語されたが、Apple が主役の座につくと、この「ワリンゴ」も次第に使われなくなり、日常的にはほとんど消滅したと言って良い。

さて次節では、[大リンゴ]にあてる中国とわが国のことばの起源や変遷、Appleの対応語の発展について検討する。

#### 4.2 [大リンゴ]に対する名称

3.1で見たように、中国北西部には[大リンゴ]の原産地が確認されている。そこで、まず、中国における[大リンゴ]に対する名称、すなわち漢名の変遷を見ていくことにする。中国においては、大果系の[リンゴ]が文献に登場するのは、小果系の[リンゴ]よりも遙かに早い。紀元前2世紀、西漢の司馬相如『上林賦』紀元前179 - 117年に出ている(孫著・青木訳(1983, p. 22)による引用)。その後、3世紀 - 16世紀頃までの農学書あるいは本草書の記述をみると、古くは「柰(Nai)」が首座を占め、その果実は、前節の「林檎」より大果で、かつ、味や香りもよく、明らかに「林檎」とは別種であることがわかる。また、同じく3世紀以降の文献に「柰(Nai)」に加えて「頻婆(Ping-ba)」(郭義恭『広志』3世紀(孫著・青木訳(1983, p. 22)による引用); de Candolle(1885, pp. 234-235)によると、'Pin-ba'という音はペルシャ語の sēb sēf の音訳が梵語の 'bimbara'、'bimba'を経て音転訛して、それに漢字をあてたものという)や「頻婆果」(『学圃余疏』1587年、孫著・青木訳(1983, p. 22)による引用)や「蘋果(Ping-guo)」(王象晋編『二如亭群芳譜』1630年、王象晋編『佩文齋廣群芳譜』1708年; 'Ping-guo' は 'Pin-ba' や 'Pin-po' が音転訛したものと考えられる)の漢名が認められる。例えば、王象晋編『二如亭群芳譜』には、次の記述がある(下線は村端)。

##### 柰

一名頻婆與林檎一類而二種江南雖有西土最豊樹與葉皆似林檎而實稍大味酸微帶澁可裁可壓可以接林檎白者爲素柰赤者爲丹柰又名朱柰青者綠柰皆熟性寒多食令人肺寒膨脹病人尤甚

##### 蘋果

出北地燕趙者尤佳接用林檎體樹身聳直葉青似林檎而大果如梨而圓滑生青熟則半紅半白或全紅光潔可愛玩香聞數步味甘鬆未熟者食如棉絮過熟又沙爛不勸食惟八九分熟者最美

「柰」は、一名「頻婆」で「林檎」とは同類ながら異種で、その果実は「林檎」よりもやや大きく、白色と赤色と青色の3種類あるとしている。また、「蘋果」は、北地に産し、果実は梨の如く大果で、味は甘いが未熟のものは綿のようで、完熟すると食に堪えない、としている。17世紀の明代以降においては「柰」のうち、特に大形類型のものを一般の「柰」と区別して「蘋果」とした可能性が高いとする者もいるが(孫著・青木訳1983, p. 23)、総じて言えば「柰」「頻婆」「蘋果」は、いずれも大果系の同種の[リンゴ]を指す漢名といえる(菊池1948, pp. 31-36、北村1950, p. 97)。

19世紀以降になると以下の漢名が本草学書や英漢・漢英辞典、中国語辞典等に認められる。

「平菓」(Williams『英華韻府歴階』1843年、Medhurst『英漢字典』1848年、Lobscheid『英華字典』1866年、Doolittle『英華萃林韻府』1872年、顔惠慶等編輯『英華大辭典』1921年)

「類菓」(呉其濬『植物名実図考』1848年)

「櫛菓」(Medhurst『英漢字典』1848年)

「蘋菓」(Hemeling『官話』1916年)

「萍菓」(顔惠慶等編輯『英華大辭典』1921年)

「苹果」(柴垣芳太郎『中国語基本語彙』1956年、張信威主編『袖珍英華新詞典』1982年、王同億主編訳『英漢辞海』1987年、李華駒主編『大英漢詞典』1992年)

これらは、いずれも異種の名称でも正名「蘋果」の異名や別名ではなく、「蘋果」の場合がそうであったように、'Ping-guo'の音訳漢名である。

ここで注目すべきなのは、現在の漢名及び'Apple'の対応語(訳語)の「苹果」が文献に認められるようになるのは20世紀の後半からで、「苹果」はかなり新しい音訳名称である点である。しかし、本論の冒頭で触れたように、この「苹果」という名称は明治前期には、すでにわが国で使われていた。そこで、以下では、わが国における大果系[リンゴ]の名称の変遷について詳細に検討することにする。

3.2の[リンゴ]の伝播経路の節では、大果系の[大リンゴ]が明治以前の江戸時代に中国から渡来して国内で栽培されたという記録がないことを述べた。しかし、10世紀の文献に「林檎」と区別して「榛」の字が認められる(深江輔仁『本草和名』918年、菊池(1948, pp. 38-39)による引用)。「林檎」には和名を付していないが、「榛」には「和名奈[ナイ]、一名布奈江[フナエ]」として和名と異名を明記している。「榛」は中国の[リンゴ]名称史上には登場しない字であることから、「椿」のように、わが国で新造された和製漢字である可能性が高い。ただし、「椿」の場合では、「椿」という「実」の存在が前提があったので、「実」としての[リンゴ]の不在という状況にあって、「榛」が和製漢字として作られたというのは多少無理があるかもしれない。今後の調査研究の成果を待ちたい。この「榛」という字は、その後の文献(源順『倭名類聚鈔』923-930年)にも登場する。そこでは、前掲の『本草和名』とは多少ことなる「奈以[ナイ]、加良奈之[カラナシ]」という和名、一名を与えている。いずれにしても、和名「奈」及び「奈以」、一名「布奈江」というのは、明らかに中国で3世紀ころから使われていた「奈(Nai)」に通じることは疑う余地はない。一方、「加良奈之」は、「奈」を「唐渡来の梨」と意訳したものと考えられる。

15世紀の文献(一條兼良『尺素往来』1487年、菊池(1948, p. 39)による引用)には、それに関しての説明はないが、中国の「奈」の字がそのまま使われている例がある。また、

この「柰」は、18世紀の文献(貝原益軒『大和本草』1709)にも認められ、以下のように「リンキン」という音にあてているが、一名「頻婆」としているものの、その記述から見ると「リンキ」、つまり[小リンゴ]を指しているのは明らかで、名称の混乱が見て取れる(貝原篤信(益軒)著・白井光太郎考註『大和本草』昭和53年, p. 410)。

柰(リンキン) [和名] ベニリンゴ

[学名] *Malus asiatica* Nakai. var. *rinki* Asami.

一名頻婆綱目云林檎ニ相似テ小也林檎ヨリ少ナカシ若水云津軽ニモ信濃ニモアリ○  
リンキント云其實日ニ晒シテ遠方ニヲクル果子トス味似<sub>レ</sub>林檎<sub>ニ</sub>甘<sup>ク</sup>香<sup>ク</sup>治<sub>レ</sub>渴<sup>ヲ</sup>治<sub>レ</sub>酒  
病<sup>ヲ</sup>。

白井光太郎(1929)は、その著書で「大和本草批正曰アカリンゴ、リンキンはリンゴの事なるを誤て柰の名とす」(p. 209)と述べているが、以後、「柰」をリンキ、リンキンの名称に誤ってあてることがあるのは、この貝原益軒の上記解説によるものと思われる。

このように、「実」としての[大リンゴ]、すなわちAppleの本格的なわが国への導入以前は、わが国では「柰」という字をあて、「ナイ」「カラナシ」などと読んでいた。それでは、幕末明治初期にAppleが本格的に持ちこまれるようになると名称はどのようになっていったのか、次にこれを検討することにする。

以下は、慶応4年の新聞記事(『中外新聞』慶応4(1868)年4月27日)である(下線科端)。

(前略) 又苹菓も方今は許多の菓を結ぶに至れり。此物世間に流布するに至らば、亦一種の物産を増補すと謂ふべし。苹菓元和産なし。西洋名アップル 俗稱オホリンゴと云ふ。林檎の属にして實大に且甜美なり。(後略)

この記事は、「林檎蔬菜等の輸入」と題した文章である。執筆者は、わが国で初めてAppleを食した1人とされる田中芳男(天保9年~大正5年)である。田中芳男は、本草学・博物学に関する高い学識をもち、開成所教授を経て、博物局の官僚として活躍した人物である。興味深いことに、田中は、「柰」の字ではなく「苹菓」という字を「アップル」にあて「オホリンゴ」と読ませていることである。この記事以前にこの「苹菓」という字はわが国では認められないので、その漢字名はおそらく田中が新造したものと考えられる。

それにしても、なぜ田中は「柰」を使わず「苹菓」を使ったのか。その理由は2つ考えられる。まず第1に、すでに述べたが、田中は、慶応3年頃にアメリカ産Appleの「実」を目にして、また実際に食しており、その味の良さに驚いた経験があったため、味や食感がそれほど優れていない中国蘋果系の「柰」という字を避けたためであろう。第

2に、「平菓」「頻果」「蘋菓」「萍菓」など、「柰」と同種の中国産[大リンゴ]の様々な漢名(異名)と区別するために、これまで中国では使われたことのない漢字名「苹菓」を使ったものと考えられる。

田中芳男は、その後もよくこの「苹菓」の字を使っている。例えば、田中芳男訳の『泰西訓蒙圖解』(1871)では、Appleの訳語及び解説として「オホリンゴ 本名柰 苹菓 實ノ大サ常ノ林檎ニ数倍ス」としている。また、田中芳男筆「苹菓の來歴」(毛筆書幅、明治29(1896)年9月、青森県りんご協会蔵)では、「苹菓オホリンゴハ 即頻婆果 本名ヲ柰ト云フ」としている。ただし、田中芳男が校閲として関わった著作、藤井徹著『菓木栽培法』(1876)では、以下のように「苹菓」と「苹果」の混用が認められる。ただし、重要なのは、わが国の文献に「苹果」の字が登場するのは、筆者の知る限り、この田中関・藤井著の『菓木栽培法』が最初である(下線村端)。

第六卷 第八十九章 <sup>りんご</sup> 林檎及<sup>オホりんご</sup> び苹果

林檎と苹果とハ固と同一種なりとも、林檎ハ本邦在來の種にして苹果ハ近年渡來の新種に係る、而して林檎の實ハ形小く、通例其周りに僅に三寸以内にして、非常に大なるも四寸に過る者少し、但し苹果ハ梨子に似て大小数等なり、而して肉ハ甚だ厚く子心ハ却て小く、且つ其味ひの美に至てハ、實に林檎の比るならば、花ハ四月中旬より・・・(後略)

第百十二回 苹果の花 洋種早熟苹果 <sup>わ せ お ほ り ん ご</sup> (わせおほりんご)

「苹果」は、「林檎(和リンゴ)」と西洋から流入したAppleとを区別するために田中芳男がつけた名称とされているが(波多江・斎藤1977, p. 4、斎藤1996, p. 94)、正確に言えば、両漢字に草冠の「苹菓」が最初に造字されたものと考えべきであろう。その後、何らかの理由で「苹果」が一般的となったものと思われる。

さて、こうして博物学や菓木栽培の分野では西洋渡來のAppleの対応語として「苹菓」あるいは「苹果」が使われていたことが確認できた。さて、一方、英和辞書ではどのような訳語が使われ、現在の仮名による対応語「りんご(リンゴ)」に至っているのだろうか。堀達之助『英和對譯袖珍辭書』(文久2年)では「林檎」があてられていたことはすでに述べた。以下は、それ以後から現今に至るまでに刊行された主な英和辞書の訳語を示したものである。

- ◇堀達之助編・堀越龜之助改訂『英和對譯袖珍辭書』明治2(1869)年：林檎
- ◇吉田賢輔『英和字典』明治5(1872)年：林檎(リンゴ)、平菓
- ◇柴田昌吉・子安峻『附音挿圖英和字彙』明治6(1873)年：林檎(リンゴ)
- ◇柴田昌吉・子安峻『増補訂正附音挿圖英和字彙』明治15(1882)年：平菓、林檎
- ◇柴田昌吉・子安峻『増補訂正附音挿圖英和字彙』明治20(1887)年：苹菓、林檎
- ◇島田豊『附音挿圖和譯英字彙』明治21(1888)年：苹果(セイヤウリンゴ)、柰 [ママ]、



Japanese apple 林檎(リンゴ) [村端注：奈は柰のこと]

- ◇イーストレキ・棚橋一郎『英和袖珍新字彙』明治25(1892)年：苹果(セイヤウリンゴ)
- ◇島田豊『雙解英和大辞典』明治33(1900)年：苹果(オホリンゴ)
- ◇増田藤之助『新撰英和辞典』大正2(1913)年：林檎、苹果
- ◇岡倉由三郎『研究社新英和大辞典』昭和3(1928)年：林檎
- ◇市河三喜・畔柳都太郎・飯島広三郎『大英和辞典』昭和6(1931)年：林檎(果实)、林檎樹
- ◇藤岡勝二『大英和辞典』昭和7(1932)年：林檎、苹果(セイヤウリンゴ)
- ◇石川林四郎『最新コンサイス英和辞典』昭和13(1938)年：林檎、苹果
- ◇『研究社スクール英和新辞典』昭和16(1941)年：林檎
- ◇福原麟太郎『研究社新スクール英和辞典』昭和32(1957)年：りんご、りんごの木
- ◇岩崎民平『研究社現代英和辞典』昭和51(1976)年：りんご、りんごの木
- ◇『研究社ライトハウス英和辞典』昭和59(1984)年：りんご、りんごの木
- ◇小稻義男他『研究社新英和中辞典』昭和63(1988)年：りんご、[植]リンゴ(の木)
- ◇『旺文社英和中辞典』平成4(1992)年：りんご、りんごの木、りんごのような果实
- ◇河村重治郎『新クラウン英和辞典』平成16(2004)年：リンゴ、リンゴの木(apple tree)

このAppleに対する訳語(対応語)の変遷から以下の諸点が浮かび上がってくる。もちろん、上で取り上げた英和辞書は、たとえ主なものと言ってもこの間に刊行されたすべての辞書ではない。したがって、結論を出すには今後の更なる調査が待たれるのは言うまでもない。

- 1) 「林檎」の字以外で初めて英和辞書に認められるのは英漢・漢英辞典でよく使われた「平菓」であること
  - 2) 田中の作字と言われる「苹菓」が英和辞書に認められるのは柴田昌吉・子安峻『増補訂正附音挿圖英和字彙』1887年で、田中の『中外新聞』の記事(1868年)からおおよそ20年も後であること
  - 3) 牧野富太郎がAppleの対応語として妥当とする名称の「苹果」の字が見られるのは明治中期の頃であること
  - 4) 大正・昭和期に入ると再び「林檎」が使われるようになり、「苹果」が併用される場合でも、それは二次的な訳語として扱われていること
  - 5) 昭和中期になると、やがて「林檎」も衰退し、仮名の「りんご(リンゴ)」が主役となり現在に至っていること
- 1) から言えることは、明治初期の訳編者らは、英漢・漢英辞書の訳語を英和辞書に採用していたことである。福沢諭吉が訓点刊行した子卿原著『増訂華英通語』(万延元

(1860年)もこの「平菓」を採用しているので、彼らは、この福沢本を参考にした可能性もある。また、2)からは、一つの訳語が英和辞書に採用されるのには、永い年月を要すことを示唆しており、大変興味深い。

なお、注目したい英和辞書が1つある。島田豊編訳の『附音挿圖和譯英字彙』(明治21(1888)年)である。この辞書は、唯一、中国渡来の[ワリング(小リング)]と西洋渡来の[セイヨウリング(大リング)]を明確に区別し、前者にはJapanese appleとして「林檎」を、後者には「苹果」「奈[マ、柰]」を、それぞれに正しい字をあてている。

さて、以下、Apple 訳語の2つの大きな移り変わりの局面に際し、その原動力となったと思われる要因を検討することとする。すなわち、1)一度定着した「苹果」が衰退し「林檎」が再び復活したのはなぜか、そして、2)漢字名を避けて仮名による名称「りんご(リング)」を使うようになったのはなぜか、である。

まず、1)の要因、「苹果」が衰退し「林檎」に変わった要因について検討することにする。結論から言えば、それは「苹果」という漢字のもつ本質的な問題であった。すなわち、この漢字は、音訓読がしにくい上、たとえ「ヘイカ」「ヒョウカ」と読むことができたとしても、それらは'Ringo'という音とはかなり距離があるため、「実」としての[リング]を想起しづらい。当初は、西洋渡来の[リング]にあてた優美な名称として使われていたが、その馴染みずらさが衰退の原因になったものと考えられる。このことは以下の引用から窺い知ることができる(斎藤1996、p. 94)。

明治も三十年代どなればもはや旧来のりんごは駆逐されてしまい、反面苹果の字は依然としてなじまず、林檎をつかおうというのが他道県の世論でした。苹果か林檎かの争いは弘前のりんご士族のプライドの次元から筆頭産地としての津軽の両目の問題となったのです。そして多数決で破れても津軽では苹果を守り続け、県りんご試験場のごときも戦後の昭和二十五年にひらがなになおすまで青森県苹果試験場でとおしたのです。

また、この難解な「苹果」という名称は、アップルの販路拡大に障害を与える恐れもあるとして、旧来の分かりやすい「林檎」の文字を流行させようとする地方の動きもあった。以下は、「名物青森林檎」と題して、青森県の技師が寄稿した記事の一部であるが、当時の青森県りんご関係者の苦悩がよく表現されている(『東奥日報』明治45(1912)年4月3日)。

#### 一 林檎と称するに決定

販路拡張会は二月総会に於て苹果の文字を改めて林檎とする件を可決した之は十数年前岩手縣に開会せる東北事業大会に於て可決確定せるものであるが今日に至ても尚学者も一般も此文字を盛に用ゐて居るが苹果は元來英語の「アップル」を訳したものであるが適当した文字とは思はれないで寧ろ林檎の方が穩当の様である殊に此

解し悪い文字は林檎の販路拡張上には誠に都合が悪い六ヶ敷い文字で多くの素人は何物を指すのやら一向に分かり悪い故に先づ本縣の如き本物で此文字を用ゐぬ事になれば自然廃して林檎となるのであるから分かり易い林檎の文字を流行させるのが拡張上に良方便であろう

これらを見る限り、「苹果」の字を「林檎」に変えようという動きは、明治30年前後からあったとみられる。一方、英和辞書の訳語に目を向けてみると、昭和に入ってもなお「苹果」の字が認められる(石川林四郎『最新コンサイス英和辞典』昭和13(1938)年)。もっとも、科学的に厳密を旨とする植物学の世界では、その後もさらに「苹果」という字を使っていたものと考えられる(牧野1949, p. 73)。また、農学者でもあり植物学の知識のあった宮沢賢治(明治29(1896)年-昭和8(1933)年)が自身の作品で「苹果」をよく使ったのは植物学的に正確を期すためだったからかもしれない。因みに、国語辞典においては、以下のように、昭和中期頃までは[リンゴ]の漢字名として「苹果」は依然として一次的なことばとして扱っている(新村出『言林』昭和24(1949)年)。

りんご [苹果・林檎](名)【植】(季、秋)いばら科の落葉喬木。中央アジアの原産で、寒地に適する。幹の高さ三米位。葉は楕円形。春、白色で紅暈ある五弁の繖形(さんけい)につづる。果実は円形、夏の末に至って熟し、味甘酸で、食用。東北地方に栽培。(後略)

ひょうか [苹果](名)【植】→りんご。

さて、上の英和辞書で見ると、昭和32年以後においては、Appleの訳語は「林檎」から「リンゴ(りんご)」に変わったが、次にその要因を検討してみよう。まず、次の引用を見て頂きたい(清水1978, p. 126)。

(前略)学者によると「中国大陸から伝来し、漢名で表現される植物は約一千種とされているが、その約四分の一は誤って命名されている」ということです。このようなことがあって、日本の植物を漢名で呼ぶのはむしろ害が多いということで、牧野富太郎博士は一八八八(明治二一年)に漢名の使用廃止をとなえました。

2節の「考察の視点」で、漢名と漢字和名(漢字名)は字体が同じだけに時として混乱を招く恐れがあることに触れたが、「林檎」の場合を考えても、元来、「林檎」は中国から[小リンゴ]を指すことばとしてわが国に持ちこまれたものでAppleの対応語としては適切ではない。そのため、植物名に漢字を使うのを避けた方がよいと牧野富太郎が考えても不思議ではない。以下は、牧野富太郎が実際に記した彼の「決意」である(牧野1888, p. 1)。

今此圖篇ニ在テハ即チ植物ノ和名ハ最普通ナルモノニ一ニヲ撰ンデ之ヲ附シ從來用  
并來レル漢名ハ總テ之ヲ廢棄シテ採ナシ

また、牧野富太郎は別の場所でも次のように述べている(牧野 1943、pp. 254)。

明治二十年頃に至て「我が日本の植物は宜しく日本名即和名を以て呼ぶべきもので  
何ぞ他國の名假るを要せん哉、故に宜しく漢名使用の從來からの因襲を打破して日  
本名を以て日本植物を呼んで可なり況てや從來我が植物に充てられし漢名には中つ  
てみなきもの頗る多ければ旁其れを排斥すべし」と絶叫し且直に實行したのが當時  
民間に居つた私であつた、つまり革新の聲を揚げたのである、従て私は和名も科名  
も共に之れをカナで書く事を決行實踐したのであつた(後略)

例えば、牧野富太郎は日本の「サクラ」の名称に関して次のように述べている(牧野  
1944、p. 259)。

(前略) 今日我邦で普通にサクラに對して使てゐる櫻の字は、元來は我がサクラに當  
で嵌めるべき字ではないが、昔の學者の認識の不足から其れが我がサクラに誤用せ  
られ、遂にそれなりズルズルとサクラに使はれるやうな習慣になつたに過ぎない。

牧野富太郎は、「サクラ」だけではなく、漢名が指す植物と混同するので日本産植物には  
仮名による和名を与えるべきである、と度々主張していた。それが、科学者の強い意見  
として「動植物名はすべて仮字表記にすべし」と文部省を動かす力になったものと思け  
れる(杉本 1998、p. 296)。その結果、英和辞書においてもやがて漢字の「林檎」が消え  
去り、現在の「りんご(リンゴ)」に至つたのである。

このように、英和辞書の訳語(対応語)に変化を与えたのは、民衆の力であつたり  
(「苹果」から「林檎」へ)、植物学者の力であつたのである(「林檎」から「りんご(リン  
ゴ)」へ)。このことは、対応語(訳語)の成立、あるいはことばの変遷のメカニズムを解  
明する大きな手がかりになるものと考えられる。

## 5. おわりに

本論の目的は、最近の研究の成果を踏まえて、「実」としてのリンゴの起源や種類、伝  
播の経路を明らかにし、その上でわが国の植物名に大きな影響を与えている中国におけ  
る関連「名称」の変遷とわが国における名称の変遷、とりわけ Apple 渡来後の「対応語  
(equivalent)」の成立過程について考察することであつた。以下は、その要点をまとめ

たものである。

- 1) 先史時代から大小2様の[リンゴ]があり、それらがもつ遺伝子の特徴から異種交配はしない。そのため、現在においても大小2様の[リンゴ]が存在する。
- 2) 現在の中国北西部、天山山脈の新疆周辺地域の「果実の森」が栽培種のもとの原産地で、人の手によって東西へと伝播されていった。わが国へは明治初年に西回りルートで米国から[大リンゴ]のAppleが持ちこまれ、それが栽培種のもととなった。
- 3) 「林檎」という字は「来禽(鳥が集まってくる)」に起源し、古来中国から[小リンゴ]を指す漢名として使われた。わが国へは同種の[小リンゴ]とその名称ももたらされた。しかし、中国では「実」の衰退とともに、その漢名も消滅していった。
- 4) 中国では、[大リンゴ]を指す漢名の歴史は[小リンゴ]のそれよりも古く、「柰」「平菓」「蘋果」などが使われ、現在の「苹果」に至っている。
- 5) 明治初年に[大リンゴ]のAppleがわが国に渡来した際、田中芳男はそれと在来の「林檎」とを区別するため「苹菓」という字を造字し「オオリンゴ」と読ませた。その後、「苹果」という字が一般的になったが、その字が持つ分かりにくさのために廃止され、大正・昭和期になると再び「林檎」が使われるようになった。しかし、牧野富太郎の指摘もあって、この「林檎」も含め、漢字名は漢名と混同してしまう恐れがあるという理由から動植物名などはすべて仮名表記に改められた。その結果、英和辞書の訳語も仮名表記となった。昭和中期のことである。

以上のことが明らかになった反面、残された課題もある。まず第1に、今回調査の対象とした英和辞書の数とは十分とは言えない。英和辞書における近現代訳語の成立過程の全容を解明するには、さらに多くの英和辞書を対象にした網羅的な調査を行う必要がある。第2に、わが国においてAppleの渡来後に一定期間であるが使用されていた「苹果」と現代中国語で使われている「苹果」との関係を一層明らかにすることである。今回の調査では、「苹果」の字が漢名として登場するのは、ごく最近の中国語関係書、あるいは辞書においてであることが明らかになった。このことからすると、現代中国語の「苹果」は、明治初期に田中芳男が造字してわが国内に普及したものが、後に誰かの手によって「実」とともに中国にもたらされたと考えても決して不合理ではない。これを確認するためには、当然ながら中国における「苹果」の来歴を詳細に検討する必要がある。もし仮に、それが裏付けられれば、日中間の語彙交流史に新しい1ページを加えることができるであろう。

## 参考文献

- 飯沼愆齋『草木図説 木部』推定執筆年1865年、北村四郎編註復刻版、保育社、昭和50(1977)年。  
イーストレーキ・棚橋一郎『英和袖珍新字彙』明治25(1892)年。  
石川林四郎『最新コンサイス英和辞典』三省堂、昭和13(1938)年。  
伊地智善継『白水社中国語辞典』白水社、平成14(2002)年。  
市河三喜・畔柳都太郎・飯島広三郎『大英和辞典』富山房、昭和6(1931)年。  
市川健夫編著『信州りんご文化誌』ゆにーく、平成17(2005)年。  
岩崎民平『研究社現代英和辞典』研究社、昭和51(1976)年。  
王象晋編『二如亭群芳譜』(牧野文庫)1630年。  
王象晋編『佩文齋廣群芳譜』(牧野文庫)1708年。  
王同億主編訳『英漢辞海』北京・国防工業出版社、1987年。  
旺文社辞書編集部『旺文社英和中辞典』旺文社、平成4(1992)年。  
大石惇「リンゴの故郷の小さな植物園」大石惇・森誠編『中国少数民族 農と食の知恵』明石書店、平成14(2002)年、pp. 21-29。  
岡倉由三郎『研究社新英和大辞典』研究社、昭和3(1928)年。  
貝原益軒『大和本草』宝永7(1709)年、白井光太郎校註、有明書房、昭和53(1978)年。  
河村重治郎『新クラウン英和辞典』三省堂、平成16(2004)年。  
顔惠慶等編輯『英華大辞典』上海・商務印書館、1921年。  
菊地秋雄『果樹園芸学(上)』養賢堂発行、昭和23(1948)年。  
呉其濬『植物名實圖考』陸應?、1848年、楊家駱編、世界書局、再版上下本、中華民國63(1974)年。  
研究社辞書部編『研究社スクール英和新辞典』研究社、昭和16(1941)年。  
研究社辞書部編『研究社ライトハウス英和辞典』研究社、昭和59(1984)年。  
小稲義男他『研究社新英和中辞典』研究社、昭和63(1988)年。  
斎藤康司『りんごを拓いた人々』筑波書房、平成8(1996)年。  
子卿原著 福沢諭吉訓点『増訂華英通語』快堂蔵版、万延元(1860)年。  
島田豊『附音挿圖和譯英字彙』大倉書店、明治21(1888)年。  
島田豊『雙解英和大辞典』共益商社、明治33(1900)年。  
清水清『植物の名前小事典』誠文堂新光社、昭和53(1978)年。  
柴垣芳太郎『中国語基本語彙』東京・江南書院、1956年。  
柴田昌吉・子安峻『附音挿圖英和字彙』日就社、明治6(1873)年。  
柴田昌吉・子安峻『増補訂正附音挿圖英和字彙』日就社、明治15(1882)年。  
柴田昌吉・子安峻『増補訂正附音挿圖英和字彙』(第2版)日就社、明治20(1887)年。  
白井光太郎『植物渡來考』岡書院、昭和4(1929)年。  
新村出『言林』全國書房、昭和24(1949)年。  
司馬遼太郎『北のまほろば 街道をゆく41』朝日新聞社、1995年。  
新村出『広辞苑』岩波書店、第5版、平成10(1998)年。  
孫雲蔚著 青木二郎訳『中国果樹史と果樹資源』青木二郎、昭和58(1983)年。  
杉本つとむ『日本文学史の研究』杉本つとむ著作選集5、八坂書房、平成10(1998)年。  
杉山芬・杉山雍『青森県のりんご』北の街社、平成17(2005)年。  
田中正武「リンゴの起源と伝播」有賀徹夫編著『園芸植物大事典5』小学館、平成元(1989)年、pp. 597-598。

- 田中芳男「林檎蔬菜等の輸入」『中外新聞』慶応4(1868)4月27日.
- 田中芳男『泰西訓蒙圖解』文部省、明治4(1871)年.
- 田中芳男校閲 藤井徹著『菓木栽培法』静里園蔵版、明治9(1876)年.
- 田中芳男「萃菓の來歴」毛筆書幅、青森県りんご協会蔵、明治29(1896)年9月.
- 大日本山林會編纂『田中芳男君七六展覽會記念誌』大日本山林會、大正2(1913)年.
- 張信威主編『袖珍英華新詞典』香港・商務印書館、1982年.
- 波多江久吉・斎藤康司編『青森県りんご史』青森県りんご百年記念事業会、昭和52(1977)年.
- 人見必大『本朝食鑑』元禄10(1697)年、島田勇雄訳注、東洋文庫312、平凡社、平成16(2004)年.
- 福原麟太郎『研究社新スクール英和辞典』研究社、昭和32(1957)年.
- 藤岡勝二『大英和辞典』大倉書店、昭和7(1932)年.
- 堀達之助『英和對譯袖珍辭書』洋書調所、文久2(1862)年.
- 堀達之助編・堀越龜之助改訂『英和對譯袖珍辭書』開成所、明治2(1869)年.
- 前田富祺監修『日本語源大辞典』小学館、平成17(2005)年.
- 牧野富太郎「緒言」『日本植物志圖篇』明治21(1888)年、再録『日本植物圖説集』牧野植物学全集、誠文堂、昭和9(1934)年.
- 牧野富太郎『四季の花と果実』通信教育振興会、昭和24(1949)年.
- 牧野富太郎『牧野日本植物圖鑑』北隆館、昭和15(1940)年.
- 牧野富太郎『植物記』櫻井書店、昭和18(1943)年.
- 牧野富太郎『續植物記』櫻井書店、昭和19(1944)年.
- 牧野富太郎『續牧野植物隨筆』鎌倉書房、昭和23(1948)年.
- 牧野富太郎『四季の花と果実』通信教育振興会、昭和24(1949)年.
- 牧野富太郎『牧野植物一家言』北隆館、昭和31(1956)年.
- 牧野富太郎『新訂牧野新日本植物圖鑑』北隆館、平成12(2000)年.
- 牧野富太郎・菊池秋雄・淺見與七・並河功監修 石井勇義編『園藝大辭典』誠文堂新光社、昭和31(1956)年.
- 増田藤之助『新撰英和辞典』丸善株式会社、大正2(1913)年.
- 源順『倭名類聚鈔』931-938年、正宗敦夫編纂復刻版、風間書房、昭和52(1977)年.
- 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』角川文庫、改訂17版、平成17(2005)年.
- 村越三千男『圖説植物辞典』中文館書房、昭和15(1940)年.
- 李華駒主編『大英漢詞典』北京・外語教学与研究出版社、1992年.
- 李時珍『本草綱目』1578年、復刻版、上海商務印書館、1954年.
- 吉田賢輔『英和字典』知新館蔵版、明治5(1872)年.
- The Century Dictionary: An Encyclopedic Lexicon of the English Language.* New York: The century Co. 1889.
- de Candolle, Alphonse. *Origin of Cultivated Plants.* New York: D. Appleton and Company. 1885.
- Doeff, Hendrik (ドゥーフ、ヘンドリック)『ドゥーフ・ハルマ』(蘭和辞典)、1811-1816.
- Doolittle, J.『英華萃林韻府』福州・ロザリオマーカル、1872年.
- Hemeling, K. *English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language (官話).* Shanghai: Statistical Department of the Inspectorate General of Customs, 1916年.
- Hepburn (ヘボン)、J. C.『和英語林集成』上海・美華書院、慶応3(1867)年.
- Juniper, Barrie E. and David J. Mabberley. *The Story of the Apple.* Portland, Oregon: Timber Press,

Inc. 2006.

Lobscheid, W. 『英華字典』 香港・デリープレスオフィス、1866年.

Medhurst, W. H. *English-Chinese Dictionary*. Shanghai: Printed at the Mission Press. 1817-1818.

Pollan, Michael. *Botany of Desire*. New York: Random House. 2001.

Vavilov, N. I. 中村英司訳『栽培植物発祥地の研究』 八坂書房、昭和55 (1980)年.

Thoreau, Henry David. Wild Apples. *The Atlantic Monthly* (November). 1862. (Reprinted in 1990 by Applewood Books, CT.)

Williams, S. W. 『英華韻府歷階』 澳門・香山書院、1843年.

*The World Book Encyclopedia*. Chicago: World Book-Childcraft International, Inc. 1978.